

# 中立のディスカール

第二次大戦期スイスのラジオ・ニュース  
「世界クロニクル」の政治・文化的位置

長崎大学多文化社会学部 葉柳 和則

## 1 はじめに

第二次世界大戦期のヨーロッパ戦線でラジオを〈武器〉とした宣伝戦が展開されたことはよく知られている。1939年8月31日、ドイツ・ポーランド国境付近の都市グライヴィッツ（当時はドイツ領）のラジオ局襲撃というナチスによる自作自演の事件が、翌日のドイツ軍によるポーランド侵攻の口実として利用されたことは、ラジオによる戦争の時代の始まりを象徴している。ここでの主たるアクターは、ドイツの国民啓蒙宣伝省（以下、宣伝省）管轄下にあった帝国放送協会（RRG）とイギリスの英国国営放送（BBC）である。両者の電波による〈バトル・オブ・ブリテン〉については既に多くの研究がなされている（Sarkowicz 1990：18-20）。

これに対して、中立国スイスの国営ラジオ局ベロミュンスター（Radio Beromünster）が、1939年から1947年にかけて毎週金曜日の夕方、19時10分から19時25分まで15分間放送していた「世界クロニクル」*Weltchronik*がヨーロッパの宣伝戦において果たした役割についての記憶は、スイスの国境の外側ではほとんど失われてしまっている。

「世界クロニクル」が多くのリスナーを引きつけるようになったのは、チューリヒ工科大学の歴史学教授ジャン・ルードルフ・フォン・ザーリス Jean Rudolf von Salis (1901-1996) がライター兼キャスターに就任してからである。フォン・ザーリスは、1940年4月30日から番組自体が終了した1947年4月18日までの期間、担当者を務め、金曜日から木曜日の一週間に起きた出来事を要約し、解説を付すウィークリー・ニュースの形式を確立した。したがって、「世界クロニクル」という言葉は、一般には彼が担当した時期の放送を指している。

後述するように、フォン・ザーリスは、彼に可能な範囲で、世界情勢に関する情報を収集・整理し、これを抑制された声で電波に乗せた。RRGとBBCの放送がプロバガンダ合戦の様相を呈していたのに対し、「世界クロニクル」は客観、中立、公正という公準にできる限り沿ったコンテンツを特徴としていた。

ところが、宣伝省の大臣ヨーゼフ・ゲッベルス Joseph Goebbels (1897-1945)

は、「世界クロニクル」を問題視し、スイスに番組を中止するよう要請した (St. Galler Tagblatt 2009)。第二次世界大戦の勃発と同時に、ゲッベルスはドイツ国民およびドイツ占領地域の住民に外国のラジオ番組を聴取することを禁止したが、その中でもBBCと並んでラジオ・ベロミュンスターを最も警戒すべき「敵性放送局」(Feindsender)と見なしていた (Grossrieder 2009)。ベロミュンスターの電波は、ヨーロッパはもちろんのこと、北アフリカ周辺においても受信することができ、RRGが発信するヨーロッパ戦線の状況とは、大きく異なった現実をリスナーが知ることになったからである (Grossrieder 2009)。

「世界クロニクル」は、RRGのプロパガンダやBBCの対抗的プロパガンダと異なり、あからさまに政治的バイアスのかかった宣伝戦を展開したわけではない。すなわち、電波に乗せられた言葉のデノテーションは決してプロパガンダ的ではなかった。しかし、可能な限り中立的な姿勢で報道することが、結果的にRRGのプロパガンダを、それどころか時にはBBCの放送内容すらも相対化することによって、別様の現実の在処を指し示すことになった。これこそがナチス・ドイツにとっての「敵性的」な振る舞いだったのである。とすれば、「世界クロニクル」がいかなる性格をもったニュース番組であったのかを解明することによって、「RRG対BBC」という図式で論じられることの多い第二次世界大戦期のプロパガンダ戦の構図を描き直すことができるはずである。

ラジオメディアに関する研究書の中で、「世界クロニクル」について一章なりとも紙幅を割いているものは管見の限り存在しない。スイスの現代史研究においては、この番組やフォン・ザーリスについての言及は数多く見られる。しかし、彼は1996年まで存命であり、スイスの中立性を象徴する知識人であったこともあり、彼の仕事に対する学術的な研究は今世紀に入ってようやく少しずつ行われるようになったところである。

フォン・ザーリスに関する唯一の評伝の著者であるチューリヒ大学の歴史学教授ウルス・ビッターリー Urs Bitterli が述べるように、「世界クロニクル」自体に焦点を当てた学術研究はいまだ上梓されていない (Bitterli 2009: 72)。他方、スイスの新聞の文芸欄 (Feuilleton) には、ラジオ・ベロミュンスターの閉局 (2008年12月29日) に関する多数の評論が掲載され、その中で「世界クロニクル」とフォン・ザーリスが20世紀スイスのメディア史において果たした役割について多様な角度から解明の光が当てられている。

しかし、ビッターリーによる評伝とフォン・ザーリス関連のアーカイブ資料の目録作成に関わったジビレ・ピラー Sibylle Birrer の研究 (2000) を例外として、フォン・ザーリスについての研究や評論は、基本的に彼が生前に出版した書籍に

基づいている。「世界クロニクル」に関して言えば、その放送原稿は1966年に彼自身の編集によって出版されており、この番組に関する大半の議論はこの書籍版を典拠としている。

書籍版は556ページに及ぶが、それでもなお抄録であり、放送された全テキストの1/3程度しか収録していない。それゆえ、「世界クロニクル」の放送内容を子細に研究するには、書籍版の編集に際して非収録となった2/3の原稿にアプローチする必要がある。その上で、収録/非収録の基準を確認することによって、——それが明示的なものであるにせよ、暗黙のものであるにせよ——テキストに対する事後的な編集のポリティクスを明らかにすることができるはずである。

書籍版が抄録となったことについてフォン・ザーリス自身は、毎週15分間の放送に見合うだけのニュースがあったわけではないため、しばしば「埋め草」が必要であり、前の放送回の再確認がそれにあたること、口頭でのニュース原稿は本来、書き言葉に比べて反復が多いためブラッシュアップが必要であること、そしてそもそも全原稿を収録すると書籍として大部に過ぎることを理由として挙げている (von Salis 1966 : 21)。編集のポリティクスに関しては、次のような説明がなされている。

抄録となったことで本質的なものが失われたとは考えていない。この編集作業に際して、今日のみで見たととき望ましくない発言として批判される可能性のある事項を隠蔽するようなことはしていないという確信がある。(von Salis 1966 : 21)。

しかし、ここで否定されている事後的な自己正当化に関する検証はいまだ行われていない。

この点を実証的に確認することは十分に可能である。というのも、フォン・ザーリスの仕事に関連したほとんどのテキストは、草稿から書簡に至るまで、スイス国立図書館内に設置されたスイス文学アーカイブ (Das Schweizerische Literaturarchiv SLA) に保管されているからである。「世界クロニクル」に関しても、放送原稿、書籍版の初版、改定版 (1981)、ラジオ・ベロミュンスター管理部門とのやりとり、リスナーからの手紙等にアクセス可能である (本稿の末尾に資料リストを掲載)。したがって、「世界クロニクル」のオリジナル原稿を含むテキストの総体を批判的に検討することで、このニュース番組がいかなる経緯により開始され、どのような言説の政治の中で放送されたのか、リスナーにどのように受容されたのか、この番組に対する意味づけが戦後どのように変化し、それが書

籍版の編集にいかなる影響を及ぼしたのかという、テキストの生成とそれが作り出す相互作用の総体を確認することができる。本稿の課題は、このような研究プロジェクトの基礎作業として、「世界クロニクル」の放送原稿の生成過程に焦点を当て、資料としての特徴を概観することである。

## 2 精神的国土防衛とラジオ

精神的国土防衛 (Geistige Landesverteidigung) は、20世紀のスイスにおける愛国的文化運動である。その主眼は、国境の外部から到来する〈非スイス的なもの〉(das Unschweizerische) の思想的影響から〈スイス的なもの〉(das Schweizerische) を守ることにある。もともとは第一次世界大戦後の思想的混乱、とりわけ、コミュニズム、アメリカニズム、アーバニズムの流入から〈スイス的なもの〉を守ろうとする自然発生的で多様な運動の総称であったが、1930年代に入るとナチズムの思想的影響からスイスを守ることへと収斂していった(葉柳 2016 : 2-4)。

1938年12月に連邦内閣がスイス文化の保護と宣伝の遂行を謳った教書「スイス文化の保護・振興の組織と課題」*Die Organisation und die Aufgaben der schweizerischen Kulturwahrung und Kulturwerbung* (通称「文化教書」)を作成し、議会に審議を求めた際に、この言葉が鍵語として使用された。これによって、精神的国土防衛は、軍事的国土防衛、経済的国土防衛と並ぶスイスの国策へと昇格した(葉柳 2016 : 2)。

「文化教書」には、スイスの4つの言語圏の相互理解を深めるための翻訳プロジェクト、当時唯一の国立大学であったチューリヒ工科大学の一般教養課程におけるスイス史とスイス伝統文化関連講義の充実等、多様な文化政策が掲げられている。しかし、二つの例に典型的に見られるように、国内の4つの言語圏の間の結束を固め、市民のアイデンティティを州や言語圏ではなく、連邦(Bund)レベルのもの、すなわちナショナルなものにするための施策がほとんどである(葉柳 2018 : 106)。

確かに、「文化教書」には「プロパガンダ」の項目もあり、ソ連やドイツのようなプロパガンダの先進国に対抗して、スイス国外に向けた情報発信を行うことの必要性が説かれている(葉柳 2018 : 106-107)。しかし、「文化教書」が作成された時点で既に、スイスはフランスとの国境を除いて枢軸国と隣接しており、1940年6月の独仏休戦協定締結以降は実質的に枢軸国に囲繞された。その結果、物質性を持った媒体、すなわち、新聞、書籍、ポスター、映画等は、国境を越えた時

点でドイツ当局による検閲の対象となるため、スイス発のプロパガンダとしての機能を果たしえなかった<sup>1</sup>。しかし、ラジオは国境を越えてリスナーに到達しうるメディア、しかも、スイスを圍繞する枢軸国の彼方にまで到達しうるメディアである。そのため、ラジオは精神的国土防衛の具体的施策の中でほとんど唯一、国境の彼岸に向けて遂行されたものとなった。この時代、物質的/身体的 (physical) な戦いとは別次元の天空で遂行される戦い、すなわち、ラジオを使用したプロパガンダ合戦は「エーテル波をめぐる戦い (der Kampf um die Ätherwellen<sup>2</sup>)」と呼ばれていた (Sarkowicz 1990: 20)。第二次世界大戦は航空機が勝敗の帰趨を決する戦いであったが、ラジオによる戦いは人間の領域である「アーエール」における戦いとは別次元にある神の領域、すなわち「エーテル」における戦いであると認識されていたのであり、中立国スイスもまたこの神話的な響きを持つ戦いに参戦したのである。

### 3 ラジオ・ベロミュンスター

1931年、スイスは中小の民間ラジオ局を国営として一本化し、スイス放送協会 (SRG) の傘下に収めると同時に、最新の放送施設を3つの言語圏に1つずつ建設した。ベロミュンスター (中央スイス、ドイツ語圏、のちにロマンシュ語圏も管轄) とソッテン (Sotten; 西部スイス、フランス語圏) とモンテ・チェネリ (Monte Ceneri; 南部スイス、イタリア語) である (DRS 2008: 13)。「ベロミュンスター」は放送施設が位置していたルツェルン州のゲマインデ (Gemeinde<sup>3</sup>) の名称であるが、日常語においてはこのラジオ局が放送したプログラムの総称でもあった (Grossrieder 2009)。

1937年にベロミュンスターの送信装置とアンテナがアップグレードされた<sup>4</sup> (Ade 2014)。この放送施設の特徴はアンテナの高さと出力の強さにある。スイス中央部ルツェルン州の標高798mのブローゼン丘に建つ、当時のスイスで最も高い建築物である215mのアンテナから送信される100kWの中波は、当時の世界のラジオ放送において最も強力なもの1つであった。BBCが電波をドイツまで確実に到達させることを意図して建設したラジオ局の出力が200kWで突出しているが、これを例外として、ベロミュンスターの出力は「ヨーロッパの最も出力の高い中波放送局の一つであった」(Ade 2014)。アルプスの谷間の集落にまで電波を届かせることが、このスペックが必要となった表向きの理由であるが、結果的には波長を531kHzに合わせれば、ヨーロッパ・アフリカ戦線のほぼ全領域でベロミュンスターの放送を受信することができた (Grossrieder 2009)。ド

イツ国内でも、ベロミュンスターの放送の方が、シュトゥットガルトに送信施設のあったRRGの放送よりも明瞭に聞こえた(Hensle 2003:17)。

1939年9月1日にドイツがポーランドに侵攻すると同時に、スイスはかねてより準備していた戦時動員(Aktivdienst)体制に入った。この一環として、3つのラジオ局は政府による統制と検閲のもとに置かれることになった。このときの連邦大統領フィリップ・エッター Philipp Etter (1891-1977) が、戦時動員体制宣言をラジオ放送によって行ったことが、スイスにおける戦争と国民統合とラジオ、これら三者の関係を集約的に表している(DRS 2008:20)。エッターはカトリック保守党の政治家で、1938年に「文化教書」の作成を主導した人物である(葉柳 2018:103)<sup>5</sup>。演説の名手として知られるエッターは、ラジオが集合的意識形成に果たす役割を熟知しており、このメディアを国民統合のための有効な言説装置として位置づけていた(葉柳 2018:107)。

スイスの母語話者の70%近くをリスナーとし、ヨーロッパ最大の言語圏であるドイツ語圏に向けて情報発信しうるラジオ局「ベロミュンスター」は、単なる地名や局の名称にとどまらず、スイスにおけるマスメディアの象徴となっていた。

[...]「ベロミュンスター」はスイスにおいては電子的ニュースの開始とその文化を代表していた。「ベロミュンスター」はラジオそのもの、マスメディアそのものだったのである。(Auf der Maur 2008)

上述したように、対外的には、ラジオは中立国スイスのナショナル・アイデンティティを、枢軸国とも連合国とも違うものとして際立たせるためのほとんど唯一の対外的宣伝装置であった。そのため、「ベロミュンスター」はセルフ・アイデンティティのみならず、外国から見た(聴いた)スイスのアイデンティティをも輪郭付けていた。

なぜなら、ラジオ・ベロミュンスターはスイスを体現し——少なくともマジョリティにとっては——ドイツ語圏スイスのアイデンティティの聴覚的解釈であった。ラジオ・ベロミュンスターはこのようにして——統合された者にとっても、異を唱える者にとっても——スイスの基準線として機能した。これは独占的なラジオがマスメディアとして果たした特筆すべき功績であった。そこにこそ、「ベロミュンスター」の神話は根柢を持っているのである。(Schade 2008)

第二次世界大戦後、ナチス・ドイツとの相互依存関係に対する批判を払拭するために、スイスは自らの中立性を証し立てる必要に迫られた。たとえば、ナチスが政権を獲得した1933年以降、ユダヤ系、共産主義系の芸術家を受け入れ、ナチスによって焚書された戯曲を上演し続けた「チューリヒ劇場」の神話化がこれに当たる（葉柳 2016：7-8）。同様に「ペロミュンスター」もまた、集合的記憶の中で「精神的国土防衛の象徴」（DRS 2008：44）、「自由な世界の象徴」（Nussbaumer 2008）として解釈されていった<sup>6</sup>。

ペロミュンスターの番組は、国内向けニュース、クラシック音楽、スイスの民俗音楽、天気予報から、動員中の兵士向けの特別番組「部隊から故郷へ *Von der Truppe zur Heimat*」（DRS 2008：20）まで多岐にわたるが、その中でスイスのナショナル・アイデンティティをとりわけ明瞭に体现した番組と見なされていたのが「世界クロニクル」であった。

#### 4 依頼

1940年2月8日、チューリヒ工科大学の歴史学教授であった当時38歳のフォン・ザーリスは、連邦大統領のマルセル・ピレーゴラ Marcel Pilet-Golaz（1889-1958）から、「世界クロニクル」のライター兼キャスターを担当するよう依頼された（von Salis 1966：13）。依頼の理由を説明することは、この番組の背景にある政治的コンテクストとフォン・ザーリスの個人史との関わりについて考察することでもある。そのため、まずは1940年までの彼の経歴を、本稿の問いに関連する限りにおいて確認する必要がある。

フォン・ザーリスは1901年にスイスの首都ベルンで生まれた。1920年に南フランスのモンペリエ大学で学業生活に入り、以後、ベルン大学、ベルリン大学、ソルボンヌ大学で歴史学を学んだ。ソルボンヌ大学在学中の1926年以降は学業の傍ら、スイスの様々な新聞、とりわけベルンに本社を置く「ブント」*Bund* 紙の通信員として活動した。このように、彼は歴史学者としての専門トレーニングとジャーナリストとしての経験の両方をパリで積んでいた。1932年に、彼はジュネーブ出身でフランス最後の古典派経済学者と言われるシモン・ド・シスモンディ Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi（1773-1842）に関する博士論文をソルボンヌ大学に提出した。その後もパリでジャーナリストとして活動していたが、1935年にチューリヒ連邦工科大学（ETH）に歴史学の担当教授として招聘された。ETHの人文系社会系には、隣接するチューリヒ大学のような研究者養成機能は与えられておらず、高等教育レベルの国民教育を行うことが期待されていた。

第二次世界大戦が勃発すると、フォン・ザーリスは連邦政治省（＝外務省）の広報部門の設立メンバーとなった。1941年に彼は、カトリック保守党の政治家でスイスの政治相を長く務めたジュゼッペ・モッタ Giuseppe Motta (1871-1940) の評伝を出版する。この書籍は前年に亡くなったモッタの外交政策に対する讃辞という性格を持っていた。

モッタは1911年に連邦閣僚に任命され、以後30年間その職にあった。1920年以降はもっぱら外務大臣を務めたため、スイスの外交政策は「モッタ外交」と呼ばれた。彼は1920年にスイスの国際連盟加盟を実現させ、国際社会におけるスイスの積極的活動を推進した。しかし他方で、カトリック保守党員として強固な反共主義者でもあったモッタは、ソ連との国交を断絶するとともに、隣国との協調関係を重視していた。その一環として、1935年のイタリアによるエチオピア併合を積極的に支持し、国際連盟による経済制裁に反対した。彼はナチス・ドイツに対しても融和路線を取っていたが、1938年にドイツが同じドイツ語圏の大国オーストリアを併合し、イタリアが言語的な類縁性を理由にスイスのロマンシュ語圏に対する領土的野心をあからさまにしたのを機に、枢軸国とスイスとの間の政治的、文化的の差異を強調し、武装中立路線を推進する立場を鮮明にした(Bitterli 2009: 55)。つまり、第二次世界大戦前夜の外務大臣モッタは、精神的国土防衛と軍事的国土防衛によって、スイスの独立と中立を持続可能なものにするを政治的な課題としていたのであり、フォン・ザーリスはこの路線を支持する知識人として政治省の広報部門に関与していたのである。

上述したように、「世界クロニクル」はもっぱらフォン・ザーリスの名前と結び付けて語られることが多い。しかし、この番組は1939年9月にジャーナリストのヘルベルト・フォン・モース Herbert von Moos (1893-1965) を担当者として開始されている。番組の前身は1934年に始まった国際連盟関連の情報番組「国際連盟クロニクル」*Völkerbundschronik* であった。1936にフォン・モースが担当者になって以降、スイスの外交政策の一環としての情報発信という性格が強くなり、3年後に「世界クロニクル」と改称されたのである (Zürcher 2009)。

フォン・ザーリスは、1966年に出版した『世界クロニクル』の冒頭で、フォン・モースから番組を引き継いだ経緯について、次のように述べている。

連邦大統領は依頼の理由について、これまで「世界クロニクル」の執筆者を務めてきたヘルベルト・フォン・モースには、国会議員に当選したことによる政治的な制約が生まれてしまった、それに彼はこの放送が政党政治的な対立の対象になることを望んでいないのだ、と説明した。(von Salis1966: 13)



続く箇所ではフォン・ザーリスは、自身が「党派性を持たない大学教授にしてジャーナリスト」であったことがフォン・モースの後任として選出された理由であると述べている (von Salis 1966 : 13)。

しかし、実際の事情はいささか異なっている。ビラーは、「フォン・モースのドイツに対する批判的な発言の数々が、彼をマイクから〈遠ざけること〉を求める動きにきっかけを与えたが、それはスイスのフロント諸派の党員に対してのみではない」と述べる (Birrer 2003 : 52)。ビラーが示唆しているのは、ドイツの親ナチズム政党であるフロント諸派 (die Fronten) だけではなく、カトリック保守党やリベラル派の自由民主党も、フォン・モースの反ナチス的スタンスに批判的であったという事実である (Zürcher 2009)。そして、1940年1月にモッタが死去したあと、政治相のポストを引き継いだのが自由民主党のピレーゴラであった。つまり、フォン・モースは連邦大統領兼政治相<sup>7</sup>であったピレーゴラによって解任されたのである。

1940年5月以降、実質的には枢軸国に囲繞されることになった中立国にとって、国土防衛政策はアンビバレントなものにならざるをえない。中立、自由、独立を維持するためには、自らの立ち位置を隣国に認めさせねばならないが、それは決して攻撃的になってはならないのである。言い方を変えれば、枢軸国とスイスとの間の差異を強調する必要はあるが、国境侵犯の理由を与えてしまう過度な批判も避ける必要があった。ドイツやイタリアとの関係の安定化を目指したモッタの外交政策を高く評価し、政治省の広報部門に関わっていたフォン・ザーリスは、精神的国土防衛の柱としての〈中立国のプロパガンダ〉という語義矛盾とも言える任務の適任者だと見なされていたのである。

## 5 執筆から放送まで

本節では、各回の放送に至るまでの原稿の生成プロセスに焦点を当てる。ここで鍵となるのは、キャスターであるフォン・ザーリス自身が、原稿を執筆していたという点、および彼がジャーナリスト経験を積んだ歴史学者であった点である。フォン・モースも自ら放送原稿を執筆していたが、上述したように、その基本スタンスは、BBCの国際放送と同様、ナチス・ドイツに向けた対抗的プロパガンダであった。これに対して、フォン・ザーリスが目指したのは、ジャーナリストティックな性格を保持しつつも、史料批判や過去とのアナロジーに基づく現在の出来事の学術的な意味づけを行うことであった (Salis 1966 : 16-19)。

フォン・ザーリスは、毎週、金曜日の早朝にその日の放送原稿を執筆した。た

だし、当時チューリヒ工科大学の教壇に立っていた彼自身が国外で取材活動を行う状況にはなかった。彼は「文字通り昼も夜も」自分が解しうる言語で放送されるヨーロッパ中のラジオ・ニュースに耳を傾け、スイスと戦争当事国の新聞に掲載された、スピーチ、コミュニケ（公式声明）、情勢分析を収集した（Salis 1966: 19, Maurer 1967: 275）。次いで彼は、ジャーナリストとしての経験と歴史学の史料批判の手法を用いて、収集した資料を分析し、最も整合的だと見なしうる形で、一週間の「世界」を把握しようとした。

フォン・ザーリスの生誕100年を記念して開催されたコロキウムにおいて、ジャーナリスト・作家クララ・オーバーミュラー Klara Obermüller は、「世界クロニクル」の放送原稿の生成過程を次のようにまとめている。

5年もの間、フォン・ザーリスはとてつもない自制心をもって、彼の手に入る限りのニュース、公文書、および信頼できる情報を精査し、資料を分析し、そこから論理的な帰結を導き出した。しかも、出来事（Geschichte<sup>8</sup>）がどのような結果になるのか既に知っている歴史学者の安全な展望台から見下ろして、この作業に従事したのではなく、出来事のただ中に立っており、彼が口にしたいかなる言葉も誤謬のリスクを身に負っていたのである。かてて加えて、もっぱらベルリンを怒らせないことに汲々としていた検閲当局が彼を悩ませていたことが、その仕事をいっそう注目すべきものになっている。（Obermüller 2003 : 88）

オーバーミュラーが最後に言及している検閲の問題は、フォン・ザーリスが金曜日の朝に放送原稿を書いてから、それが19時10分にマイクの前で彼自身によって読み上げられるまでのプロセスに集約的に現れている。原稿を書き終えたフォン・ザーリスは、11時25分発の急行に間に合うようチューリヒ駅に急ぎ、速達便でベルンにあるスイス・ラジオサービス（der Schweizerische Rundspruchdienst）の管理部に原稿を送った。ベルンで検閲を受けた原稿は、同じく速達便でチューリヒのスタジオに返送され、18時までには「ベルンにて、閲読済み」、「ベルンより、問題なし」といったメモの記された原稿がフォン・ザーリスの執務机の上に置かれた。彼は、放送開始まで約1時間、原稿に最終的な推敲を施した<sup>9</sup>。このプロセスが週に一回、5年にわたって続けられたのである。

## 6 検閲と自己検閲

1939年8月29日、ナチス・ドイツのポーランド侵攻が現実視されるようになったことを受け、スイス政府は9月2日にスイス・ラジオ協会（SRG）の活動を停止させ、その管理部門スイス・ラジオサービスを政府の直接の管轄下に置いた（DRS 2008：20）。この時期のスイスにおいて検閲を担当していたのはスイス軍参謀本部の「出版とラジオ部門（die Abteilung Presse und Funkspruch）」であった（Bitterli 2009：66）<sup>10</sup>。この体制に基づいて、スイス政府は1940年の1月に「プログラム編成のための指針（Richtlinien für die Programmgestaltung）」を公布し、同年10月には「隣国」とその同盟国に関する報道の際に「強度の自制」を求める通達を各ラジオ局に送った（von Salis 1978：79）。

政治的な内容を含むラジオ番組に対する検閲に関して特徴的なのは、それが「事前検閲（Vorzensur）」であったことである。スイス政府は基本的に「事後検閲（Nachzensur）」を方針として打ち出していた（Kreis 1973：429）。それゆえ、新聞、雑誌、書籍、映画、演劇等の広義のメディアは、出版ないし上演の後で「出版とラジオ部門」の検閲を受けていた。つまり、検閲当局が事前に直接、出版・上演の可否を判断したり、修正や削除を指示したりするのではなく、出版者や芸術家が精神的国土防衛の理念を踏まえて、事前に「自己検閲（Selbstzensur）」することが暗黙のうちに求められていたのである。これとは対照的に、ラジオに関してのみ事前検閲の体制が取られていたのは、「エーテル波」を媒体とするラジオ放送の場合、一度送信されてしまうと修正や削除は不可能であり、その影響は即座に国境を越えて広がっていくからである。

フォン・ザーリスは「世界クロニクル」に対する検閲について次のように述べている。

私は1940年8月23日にスイス・ラジオサービスの所長、グロッグ博士宛の手紙で次のように書いた。「もし〈出版とラジオ部門〉が、思想信条の自由に対する強い制約、およびその統制権の濫用や嫌がらせによって、この〔番組の〕活動を不可能にしたり、やくだいもないものにした場合には、私は『世界クロニクル』への協力を即座に止めさせていただきます」。(von Salis 1966：14)

放送が始まってみると、大半の原稿に対しては、内容に立ち入った検閲は行われなかった。「ときおりは文体上の変更や削除が指示されていることもあったが、

時が経つに連れて、こうした修正はほとんどなくなっていった」(von Salis 1966: 14) とフォン・ザーリスは回想している。

ここでのフォン・ザーリスの言葉から、『世界クロニクル』の放送内容に対する事前検閲は形式的なものであった」という帰結を導き出すことはたやすい。しかし、そもそもフォン・ザーリスが第二次世界大戦勃発後に「世界クロニクル」の新担当者として選任されたのは、彼がスイス政府の外交政策を支持していたからであるという経緯を再確認する必要がある。つまり、彼は自己検閲するどころか、それ以前に、スイス政府の検閲の方針を内面化していたと解することもできるのである。

1970年代末に上梓された回想録の中で、フォン・ザーリスは、「検閲は文体を洗練させる (Zensur verfeinert den Stil)」というフレーズを二回にわたって記している (von Salis 1978: 42 u. 79)。さかのぼって1966年の「世界クロニクル」書籍版では、「検閲は [...] 確かに事物をある種の慎重さをもって、しかしそれにもかかわらず理解可能な形で表現することを促しているのである」(von Salis 1966: 151) と説明していた。つまり、彼は、(自己) 検閲と、中立国スイスの自由・独立を守るための「エーテル波をめぐる戦い」とを相互排他的なものだとは見ていないのである。同時に彼は、事前検閲をくぐり抜けるために自らの原稿に対して自己検閲を行いながら、それでもなお国境の彼岸にまで届く、「理解可能な」テキストを紡ぎ出しえたところに、自らの知識人としての存在価値を見出そうとしている。それどころか先の回想録の中では、彼は第二次世界大戦のほとんどの期間「世界クロニクル」の担当を続けたことについて、「エーテル波を使ったパルチザン活動」(von Salis 1978: 82) と自己評価している。

## 7 リスナー

「世界クロニクル」の放送が枢軸国に対する「パルチザン活動」と見なしうるかどうかについては、今後の検証を待たねばならない。ただ、一つだけ確かなことは、「ベルリンを怒らせない」ための事前検閲と自己検閲が生み出す、抑制された文体にもかかわらず、フォン・ザーリスの声は、スイスの人びとのナショナルな結束を強め、国外のリスナー、とりわけドイツ占領地域のリスナーたちを鼓舞し続けたという事実である。

たとえばビッターリーは、少年時代に家族とともに聴いた「世界クロニクル」について次のように回想している。

彼の本を読むはるか前から、私は彼の声を知っていた。[...] 金曜日の晩。ラジオ・ベロミュンスターで、ジャン・ルードルフ・フォン・ザーリス教授は、目下生じている出来事について論評する。15分にわたって、19:10から19:25まで。父親、兄、そして私は居間へと急ぐ。ミシンの上に木製の装飾枠の付いた不格好なラジオ受信機が置かれている。私たちは放送局を選び、スピーカーの音量を上げる。上げすぎないように気をつけながら。というのも母親が、この世の惨禍についてこれ以上耳にしたくない、と台所から叫ぶ声が聞こえるからである。(Bitterli 2009: 9)

ここからは、ピッター一家の男たちが、週に一度の儀式のようにして、ラジオの前で「世界クロニクル」に耳を傾けていたことがわかる。

これは銃後の市民たちの間だけではなく、国境警備のために動員されていた兵士たちの間でも同様であった。戦後、スイスの代表的作家・知識人となるマックス・フリッシュ Max Frisch (1911-1991) は、第二次世界大戦の勃発と同時にイタリア側の国境防衛のために動員され、砲兵としてイタリア語圏のテッシン州に駐屯した。彼はその際の経験を従軍日記『背囊からの紙片』*Blätter aus dem Brot-sack* (1939) として公表しているが、その中で、夕食のために食堂に集った兵士たちが、ラジオからイタリア語の放送が聞こえていることに腹を立て、チャンネルを「ベロミュンスターにしろ!」と大騒ぎを始めたというエピソードを記している (Frisch [1939] 1986: 139)。軍事的国土防衛者である兵士たちのナショナルな意識は、精神的国土防衛の一環として制作された「ベロミュンスター」の放送と深く結びついていたのである。

ナチス・ドイツが降伏すると、国境の彼岸、とりわけドイツ占領地域のリスナーから、フォン・ザーリス宛てに感謝の手紙が届くようになった。たとえばオランダで身を潜めていたドイツ系ユダヤ人、ハインツ・グラウマン Heinz Graumann は1945年5月24日付けの手紙に次のように書いている。

プロパガンダ的な感じはまったくありませんでした。感じたのは、私情を交えない事実についての報告、戦争のない国の声、明晰さ、視野の広さでした。もちろん政治的な意味での慎重な言い回しがされていましたが、それでも真実に対する良心を、さらに言えば人間という存在に対する思慮をいつも感じ取ることができました。まさにそれゆえにこそ、あなたの言葉はかくも大切だったのです。私たちは誓約者同盟<sup>11</sup>のみなさんの心の温かさを感じ、同時に、中立を守り、客観性を確保しようと努めている知識人の比類なき学識に

基づく言葉を聞いたのです。(Graumann 1945)

ここからは、「検閲は文体を洗練させる」というフォン・ザーリスの方法が、国外のリスナーたちに十分に理解されていたことをうかがい知ることができる。

## 8 資料分析の方向

グラウマンの言葉にあるように、フォン・ザーリスが、ドイツ宣伝省のプロパガンダやBBCの対抗プロパガンダのディスカールではなく、可能な限り中立性と客観性を志向した抑制的なディスカールでもって放送を続けたことで、「世界クロニクル」は世界の現状と向かう先についての最も信頼のできる報道番組として聴取された。この文脈において、「検閲は文体を洗練させる」とは、スイス国内の検閲のみならず、ドイツ側の検閲をもかいくぐってメッセージを届けるという意味すら帯びてくる。つまり、フォン・ザーリスの確立した中立のディスカールとは〈メタ・プロパガンダ〉レベルでのポリティクスを遂行していたと解しうるのである。

とはいえ、「検閲は文体を洗練させる」という言葉を裏付けるためには、実際にベルンの検閲当局がどの程度の修正・削除意見を彼の放送原稿に書き込んだのかといった事項を具体的に確認する必要がある。第1節で触れた、書籍版における放送原稿の選択と排除の問題も含めて、第二次世界大戦期の検閲と自己検閲、および戦後における再解釈と書籍版の成立過程、さらにはリスナーたちの受容プロセスの解明等、なすべき課題は数多く残されている。つまり、スイス文学アーカイブに保管されている「世界クロニクル」関連資料の実証的調査が行われることによってはじめて、「世界クロニクル」と「ペロミュンスター」は第二次世界大戦期のスイスの中立性をめぐる神話から解放されるのである。

## 注

<sup>1</sup> ドイツおよびその占領地域では、宣伝省による検閲を受けた書籍、映画、戯曲のみが販売、上映、上演を許されていた。これによって、ドイツ語圏スイスの出版者や芸術家は、ナチスの文化政策に従うか、ドイツから撤退するかという選択を迫られ、彼らの多くはスイスに帰国した。

<sup>2</sup> 「エーテル (aether)」は、古代ギリシアにおいては大気の上層、雲や月の領域、ゼウスの統べる領域、ないしはこの領域を満たす大気を意味していた。下層の大気は「アーエール(aer)」と呼ばれ死すべき存在である人間が呼吸するものであり、対して「エーテル」は神が呼吸する

純粋な大気である。近世・近代科学においては、エーテルは光の波を伝える媒質とされていたが、アインシュタインの特殊相対性理論によってエーテルの存在は根拠から否定される。しかし、その後もこの言葉は「天空」を指す雅語として使用された。

<sup>3</sup> ゲマインデはスイスの地方自治体の最小単位であり、日本の市町村にあたる。

<sup>4</sup> 1940年に同じく国営の短波放送であるスイス国際ラジオも開始された。ただし、ドイツでは短波ラジオ受信装置の所持は宣伝省により処罰の対象とされており、他の国でも十分に普及していなかった。

<sup>5</sup> スイスでは、一党独裁を避けるため、閣僚は議会を構成する各党から比例配分に近い形で選出される。連邦大統領のポストは1年ごとの輪番制であり、大統領期間中も閣僚職を兼任する。第二次世界大戦の勃発時、エッターは内務大臣を勤めながら大統領を兼任していた。

<sup>6</sup> インターネットラジオへの切り替えに伴って、ラジオ・ペロミュンスターは2008年12月29日をもって放送を終了したが、アンテナを含む放送施設は文化財保護法に基づいて、スイスの記憶の場として保存されることになった。

<sup>7</sup> スイスの大統領が閣僚による輪番制であるのは、独裁者を生み出さないための仕組みである。これは1848年に連邦憲法が制定されて以降変化していない。他方、各閣僚は専門分野を有しており、再任されても同一の省を担当し続けることが多い。

<sup>8</sup> Geschichte は通常「歴史」と和訳されるが、語源的には *geschehen*（生起する）に由来するため、文脈に合わせて「出来事」の訳語をあてた。

<sup>9</sup> この速達と急行を組み合わせた放送原稿のやり取りは、5年の間一度も放送開始時間に遅滞をきたすことはなかった。この時期既に、スイスには信頼性の高い鉄道と郵便のネットワークが存在していたからこそ成立しえた検閲システムである。

<sup>10</sup> 「出版とラジオ部門」は、スイス軍の最高司令官アンリ・ギザン *Henri Guisan* 将軍 (1874-1960) の発案で設置された (DRS 2008 : 20)。軍事的国土防衛と精神的国土防衛の結び付きをここに見出すことができる。

<sup>11</sup> スイスの正式名称は「スイス誓約者同盟 (Schweizerische Eidgenossenschaft)」である。

※本稿は科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究、課題番号 15K12866) に基づく研究プロジェクトの一環として執筆された。

## 参考文献

- Ade, Peter, 2014: *Mythos Beromünster bleibt*. In: *Markgräfler Tagblatt*, 2. März 2014.
- Anonym, 2009: *Partisan im Äther*. In: *St. Galler Tagblatt*, 27. Juli 2009. ※匿名の新聞記事の引用に際しては、新聞名を文献注に記す。
- Auf der Maur, 2008: Jost: *Beim dritten Ton ist es genau...* In: *Neue Zürcher Zeitung*, 28. Dezember 2008.
- Birrer, Sibylle, 2000: *Nachfragen und Vordenken: Intellektuelles Engagement bei Jean Rudolf von Salis, Golo Mann, Arnold Künzli und Niklaus Meienberg*. Zürich: Chronos, S. 35-88.
- Bitterli, Urs, 2009: *Jean Rudolf von Salis. Historiker in bewegter Zeit*. Zürich: Verlag Neue

Zürcher Zeitung.

Frisch, Max, [1939] 1986: *Blätter aus dem Brotsack*. In: Mayer, Hans (Hg.): *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge. In sieben Bänden*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp, S.11-173. (Original: *Aus dem Tagebuch eines Soldaten*. In: *Atlantis. Länder, Völker, Reisen*. 11. u. 12. 1939.)

Graumann, Heinz (an J. R. von Salis), 24. Mai 1945. SLA, Nachlass JRS, A-1-f/10.

Grossrieder, Beat, 2009: *Im Schatten des Heimatsenders*. In: *Die Wochen Zeitung (WOZ)*, 2. Juli 2009.

Hensle, Michael P., 2003: *Rundfunkverbrechen: Das Hören von "Feindsendern" im Nationalsozialismus*. Berlin: Metropol.

葉柳和則 (編著) 2016 『チューリヒ劇場と文化の政治』 研究叢書117 日本独文学会。

——— 2018: 「テキストとしての〈文化教書〉(1938) ——ナチス時代のスイスにおける〈精神的国土防衛〉運動の理路」『インターカルチュラル』(日本国際文化学会) 第16号 pp. 99-114.

Kreis, Georg, 1973: *Zensur und Selbstzensur. Die schweizerische Pressepolitik im Zweiten Weltkrieg*. Frauenfeld: Huber.

Maurer, Rudolf, 1967: *Weltchronik 1939-1945*. In: *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte* (Schweizerische Gesellschaft für Geschichte). Bd. 17, S. 274-277.

Nussbaumer, Hannes, 2008: *Letzter Sendeschluss auf Beromünster*. In: *Tages Anzeiger*, 26. Dezember 2008.

Obermüller, Klara, 2003: «*Ein Verstehender zu werden ist schon recht viel*». In: Ducrey, Pierre und Hans Ulrich Jost (Hg.): *Jean Rudolf von Salis, die Intellektuellen und die Schweiz*. Zürich: Chronos, S. 85-91.

Sarkowicz, Hans, 1990: *Der Kampf um die Ätherwellen*. In: Sarkowicz, Hans und Michael Crone unter Mitarbeit des Deutschen Rundfunkarchivs (Hg.): *Der Kampf um die Ätherwellen: Feindpropaganda im Zweiten Weltkrieg*. Frankfurt a. M.: Eichborn, S. 7-61.

Schade, Edzard, 2008: *Faktisches zum Mythos Radio Beromünster: Rückblick auf 77 Jahre Radiogeschichte*. In: *Neue Zürcher Zeitung*, 28. Dezember 2008.

Schweizer Radio DRS, 2008: *Die Geschichte des Radios in der Schweiz von 1911-2008*. Zürich: Schweizer Radio DRS. ※引用に際しては文献注に DRS と略記する。

von Salis, Jean Rudolf, 1966: *Weltchronik 1939-1945*. Zürich: Orell Füssli.

———, 1978: *Grenzüberschreitungen 2: Ein Lebensbericht*. Frankfurt a. M.: Insel.

Zürcher, Christop, 2009: *Moos, Herbert*. In: Stiftung Historisches Lexikon der Schweiz (Hg.): *Historisches Lexikon der Schweiz*. Basel: Schwabe.

([http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D\\_33564.php](http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D_33564.php) アクセス: 20. Februar 2018)



表 スイス文学アーカイブ所蔵の「世界クロニクル」関連資料リスト

分類番号	タイトル	補足説明
A-1-f/1	「世界クロニクル」1940年／1941年	「世界クロニクル」の放送原稿。ただし、1966年の書籍版に収録された部分は、A-1-f/17-26に移されている。タイプ打ち原稿に手書きとタイプ打ちの修正が施されている。
A-1-f/2	「世界クロニクル」1942年	
A-1-f/3	「世界クロニクル」1943年	
A-1-f/4	「世界クロニクル」1944年	
A-1-f/5	「世界クロニクル」1945年	
A-1-f/6	「世界クロニクル」1946年	
A-1-f/7	「世界クロニクル」1947年	
A-1-f/8	D-Dayを1944年5月10日と予想したこと（「世界クロニクル」1944年4月14日）をめぐる論争	スイス、イギリス、フランスの新聞記事、手紙、葉書。
A-1-f/9	新聞雑誌、ラジオ、書籍	フォン・ザーリスが出版物の原稿審査係を務めた際の書簡。
A-1-f/10	「世界クロニクル」に関する書簡、1940年代～1960年代、ファイル1、「ラジオ・ベルン」／「ラジオ・チューリヒ」／書簡A-H	「世界クロニクル」のリスナーからの書簡とそれに対する返答。アルファベットは手紙の差出人／名宛人の頭文字。
A-1-f/11	「世界クロニクル」に関する書簡、1940年代～1960年代、ファイル1、「ラジオ・ベルン」／「ラジオ・チューリヒ」／書簡I-Z	
A-1-f/12	「世界クロニクル」に関する書簡、1940年代～1960年代、ファイル2、書簡A-Z	
A-1-f/13	「世界クロニクル」に対する反応	新聞記事、手紙と新聞記事の翻訳、写真。
A-1-f/14	自筆ノート： 「世界年代記」放送原稿1940年～1945年全体のまとめと年ごとのまとめ	書籍版の冒頭、および各章の冒頭に置かれた解説文の元になったノート。
A-1-f/15	手書き原稿／ノート「平和会議に関するパリからのラジオ放送、1946年7月29日～1946年8月2日。タイプ打ち原稿「マサリク氏の演説」	パリ平和会議に関する放送原稿、チェコスロバキアの政治家 Jan Masaryk の講演に関する記事。
A-1-f/16	タイプ打ち原稿「ベッヘリ・インタビューザーリス、オーストリアについて語る」1946年5月7日	スイスの山岳リゾート地ベッヘリで行われたインタビューの原稿。
A-1-f/17	タイプ打ち原稿、手書きの修正あり、章「1939年」と「1940」年	「世界クロニクル」の放送原稿から書籍版（1966年）のために抽出したページを元に、出版のための推敲を行ったもの。書籍版は1年が1つの章を構成している。
A-1-f/18	タイプ打ち原稿、手書きの修正あり、章「1941年」	
A-1-f/19	タイプ打ち原稿、手書きの修正あり、章「1942年」	
A-1-f/20	タイプ打ち原稿、手書きの修正あり、章「1943年」	

分類番号	タイトル	補足説明
A-1-f/21	タイプ打ち原稿、手書きの修正あり、章「1944年」	「世界クロニクル」の放送原稿から書籍版（1966年）のために抽出したページを元に、出版のための推敲を行ったもの。書籍版は1年が1つの章を構成している。
A-1-f/22	タイプ打ち原稿、手書きの修正あり、章「1945年」	
A-1-f/23	タイプ打ち原稿、手書きおよびタイプ打ちの修正あり／[カーボン紙コピー]章「〈世界クロニクル〉の依頼とその実施」	書籍版のまえがきが続いて置かれた、番組の担当依頼と放送に至るまでの経緯を説明した章の原稿。
A-1-f/24	『世界クロニクル』（1966年）に関するフォン・ザーリス自身による新聞記事	フォン・ザーリスが書籍版についての解説を記した記事
A-1-f/25	『世界クロニクル』（1966年）に関する書評と新聞記事、1966年～1968年	書籍版について書かれた書評と新聞記事。
A-1-f/26	『世界クロニクル』（1966年）に関する書簡、1966-1968	書籍版をめぐる出版社およびフォン・ザーリスに宛てられた書簡。
A-1-f/27	『世界クロニクル』改訂版およびJSRの80歳の誕生日に関する新聞記事と書評、1981年～1982年	1981年に出版された改訂版、およびフォン・ザーリスの「傘寿」に関する記事と書評。
A-1-f/28	『世界クロニクル』改訂版およびJSRの80歳の誕生日に関する書簡、1981年～1982年	1981年の改訂版をめぐる出版社およびフォン・ザーリスに宛てられた書簡。
A-1-f/29	新版に関する多様な資料	出版社による広告、著者献本のリスト、書評のための献本リスト。

スイス国立図書館附設のスイス文学アーカイブに保管されているフォン・ザーリスの遺稿類を収めた192個の箱は、「作品(A)」、「書簡(B)」、「コレクション(C)」、「追加(D)」に大区分される。「作品(A)」は、「書籍として出版された作品(1)」、「ジャーナリストとしての仕事と講演(2)」、「講義(とゼミナール)(3)」に区分され、「書籍として出版された作品(1)」は出版年順に(a)～(m)に下位区分される。『世界クロニクル』はフォン・ザーリスの6番目の書籍であるため記号(f)が振られている。したがって、A-1-fが「世界クロニクル」関連の箱を意味する。/の後の数字は箱の通し番号である。